（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	須川　まり
論文題目	日本映画史における観光都市京都表象分析研究		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、日本映画と観光都市京都の重層的構成について、京都の戦後史を踏まえて多角的に分析する映画研究である。映画都市京都の歴史は、日本で初めてフランスからシネマトグラフを導入したときから始まり、日本独自のジャンル映画である「時代劇映画」を確立させた功績から、京都市と映画史の関係性は時代劇映画を製作してきた映画撮影所や映画会社の歴史という映画史解説で語られることが多い。このような先行研究に対して、本論文は京都映画研究において、ほぼ空白領域たる「京都の現代劇映画」に着目し、当時の製作資料や政府関係資料などの一次資料リサーチを通して実証的かつテクスト分析的考察をし、京都映画の独自性を考察する。

本論文の目的たる広義的な京都映画史を確立するにあたり、本論は、既存の日本映画史研究から看過されてきた「都市表象」に着目し、分析手法においてもテクスト分析に始まり、観客論、作家論、主題論などの映画学の多様理論を用いる。また、製作当時の社会的背景を探るにあたり、都市論、文化論、観光論などの社会科学分野の理論も新たに導入し、日本映画史と京都市史の影響関係、そして京都の現代劇映画の歴史的意義を横断的に探究している。

本論文は、全５章を、戦後の京都の都市的性格を定める３つのキーワード（第１部：京都人、第２部：観光客、第３部：都市景観）に区分している。まず、第１部（第１章）で京都人が認識している京都の風土を考察し、さらに第２部（第２章、第３章）では観光客の視点から見た京都の都市イデオロギーと観光都市京都の受容プロセスを検索し、第３部（第４章と第５章）では、第１部と第２部で定義した京都の都市性を踏まえて、京都市による観光都市政策が京都の都市景観に及ぼした影響を作品分析から解明している。

具体的な考察対象および分析手法は以下の通りである。

第１章では、戦後京都を舞台にした映画を、少なからず製作している吉村公三郎監督の代表作『偽れる盛装』(1951)を再考察し、京都独自の風土（都市構成）がいかに動的視覚化されているかについてテクスト分析し、本作の映画史的位置づけを再考する。テクスト分析においては、さらに、この映画『偽れる盛装』が超一流日本映画作家の溝口健二の『祇園の姉妹』(1936)のオマージュ作品である点に着目し、吉村と溝口の京都在住についての発言資料をリサーチし、両者の京都市に関する価値観を、文化人類学や花街研究における京都独自の文化的価値観に照合して、両作品を比較分析する。この研究成果から、都市風景（京町家や河橋）を用いて京都の風土を動的視覚化させる映画的都市表象の強調性を明確にし、『偽れる盛装』が京都映画表象史の主要作品であることを論証する。

第２章では、１９５０年に京都市が「国際文化観光都市」を宣言し、「文化」を戦後の都市イデオロギーに掲げた点に着目し、戦後日本における「文化」の歴史的位置づけと「文化」の受容プロセスについて文化論を導入した映画的主題論から、「文化」を主要テーマにした木下惠介監督の初長篇カラー映画『カルメン故郷に帰る』(1951)を分析し、「文化」論を再定義する。さらに、戦後京都を扱った世界映画史上、超一流監督たる小津安二郎作品を論証し、観光客の視点で描かれた小津の京都表象と戦後の「文化」概念との関係性を解釈する。この考察成果から、国粋的に戦前風景を保護するという矛盾した都市イデオロギーとの間に類似性を見出し、従来の小津研究に対して、小津の京都表象に対する日本と海外の映画研究者の評価のずれの原因を、「文化」論や京都の観光都市計画に存在する矛盾によるものと結論付けている。

第３章では、１９６０年頃から日本映画産業が斜陽化した原因のひとつに、１９６０年代の「観光」ブームを取り上げ、日本映画変容について論証する。すなわち、観客論や映画産業論にとどまらず、娯楽映画作家と呼ばれた中村登監督が観光表象を様々なジャンル映画に盛り込んでいる点に着目し、娯楽としての映画鑑賞と観光体験の類似性を観光論と映画学の両観点から論証する。また、本章の議論の切り口は、既存の日本映画研究において、映画産業斜陽化の原因をテレヴィとする固定観念や、研究不十分な「観光」と映画の関係性や中村登の作家性に対して、新たな解釈を提示することになる。

第４章では、観光都市化が進んだ１９９０年代以降の京都を舞台にしながら、観光名所を極力排除した『お引越し』(1993)、『マザーウォーター』(2010)を論証し、第１章の議論を踏まえて、匿名性の高い都市風景である自然景観から、京都映画独自の都市表象の抽出を試みる。この分析結果から、清水寺などのランドマークを使わずに「京都らしい」都市表象を水の表象によって形成していることを具体的に究明した。

第５章では、観光都市京都化を積極的に推進してきた京都市による都市計画の過程を確認した上で、前述の論証を踏まえて、京都の都市表象史を再検討する。京都市が目指した「京都らしい」景観と、観光客が抱く京都のイメージの関係性を解明にするために、「日本らしさ」を追求した日本映画と明治時代の日本を撮影したアメリカの初期映画（アメリカ議会図書館にて閲覧した所蔵品17本）を比較分析し、日本映画監督が演出する「京都らしさ」と外国人の求める「日本らしさ」の共通点を考察する。それによって、１９１０年代頃まで欧米で流行したジャポニスム（日本美術から西欧美術への影響）に着目し、この分析結果から、西欧美術に多大な影響を与えた歌川広重の作品に見られる橋と傘の表象が、アメリカの初期映画だけではなく、２１世紀以降の京都を舞台にした日本映画にも存在することを指摘する。

最後に、都市表象を介して日本映画史と観光都市京都の緊密な相互関係が存在することを結論としている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、既存の京都映画研究における時代劇や映画撮影所を軸とする狭義的な日本映画史的位置づけに疑問を投げかけ、同時代の京都を撮影した映画における都市表象と京都の都市史の相互関係という新たな側面に着目し、一次資料リサーチを通したテクスト分析的考察に加えて、都市論、文化論、観光論、京都学、都市政策論などの社会科学分野の先行研究を応用しながら、京都の都市イデオロギーと京都映画史の社会的背景を補填した上で、京都の現代劇映画の歴史的意義を解明したすぐれた論文である。

申請者は、従来の日本映画研究に欠落している都市表象分析研究を導入するにあたり、海外の映画都市論の先行研究（『パリ、シネマ―リュミエールからヌーヴェルヴァーグにいたる映画と都市のイストワール』［フランス原書、1987年］）を手掛かりに、映画産業の動向に加えて、都市のイデオロギーと日本映画史の社会的背景を踏まえた、映画学における戦後の京都の受容プロセスとイメージ形成の過程を明らかにしている。

本論文の議論の方向性は、全５章を通して、京都と映画を結びつける新たなキーワードとして、京都の風土、観光、都市景観の３つの観点を見出し、項目ごとに他分野の理論を映画的分析手法に応用しながら、京都映画の都市表象史を確立することに向けられている。また、アーカイヴ調査を通して、映画作品の一次資料（脚本、プレス記事、当時の作品評、インタビュー記事等）、当時の政府関係資料などを網羅的にリサーチした上で研究結果を導き出しており、論文全体を通して実証的かつテクスト分析的に考察された本論文は、京都映画の新たな画期的分析手法としても充実している。

第１章で、申請者は、すぐれた京都の現代劇映画を輩出している吉村公三郎の『偽れる盛装』(1951)を取り上げ、本作における都市表象を、京都の風土を色濃く反映したものとして京都映画における都市表象史の出発点に位置づけている。テクスト分析では、『偽れる盛装』のオマージュ作品である溝口健二の傑作『祇園の姉妹』(1936)の京町家の表象から京都の閉鎖的な都市性を見出し、吉村が溝口の京都表象をどのように発展させたかを比較分析し、イギリスの映画研究者ローラ・マルヴィによる視覚的快楽の理論を用いて、『偽れる盛装』が京都の生活圏と花街の間に存在する不可視な境界線を視覚化させていることを具体的に解明している点が評価できる。

第２章では、戦後の京都の都市イデオロギーを解明するために、１９５０年に京都市が掲げた国際観光文化都市宣言の条文に複数回登場する「文化」というキーワードに着目し、文化を扱った木下惠介の『カルメン故郷に帰る』(1951)の文化表象と製作当時の社会的背景から映画史的に「文化」を再定義し、戦後の日本国家のアイデンティティの軸である「文化」概念を指摘している。さらに、前半の議論を踏まえて、日本映画の巨匠で東京出身の小津安二郎が戦後観光客の視点から京都を何度も描いている点に着目し、従来の小津研究における京都表象の評価が分かれる問題を映画史的背景から再考し、戦後の「文化」概念における矛盾が小津の京都表象の評価のずれに繋がったのではないかという結論を導き出し、先行研究に新たな解釈を提示している。

第３章では、京都市の国際観光文化都市宣言の第１条に登場する「観光」に着目し、京都における映画と観光の相互関係を探究している。申請者は、１９６０

年以降の日本映画産業の斜陽化の原因をテレヴィの台頭とする従来の見解に対して、１９６０年代以降の観光ブームから捉え直そうとしている。さらに観光を扱った日本映画（『東京物語』[1953]、娯楽映画作家の中村登作品群）を取り上げ、これまでの映画学的分析手法では欠落していた観光学の理論を映画的テクスト分析に導入し、娯楽としての映画鑑賞体験と観光体験の類似性を指摘している。また、日本映画研究においては研究不十分で多様なジャンル映画を扱ってきた中村登について、松竹大谷図書館の一次資料調査（製作当時の資料、新聞記事とインタビュー記事をまとめたスクラップブック、プレスシート、カタログ）と遺族へのインタビューを行い、それらの調査結果とテクスト分析から、中村が意図的に娯楽性を重視した観光体験を映画作品に投影していることを実証的に解明し、中村登の作家性の明瞭化に貢献している。

第４章および第５章では、京都市による観光都市政策が十分に実行された１９９０年代以降の京都を舞台にした映画を取り上げ、都市政策が都市景観に及ぼした影響を映画史的に探究し、これまでの議論を踏まえた新たな京都映画都市表象史の構築を試みている。第４章では、観光名所を排除した自然景観の表象から、京都独自の水の表象を見出し、続く第５章では、第２章や第３章の議論を踏まえた上で、観光客から見た「京都らしさ」が２１世紀以降の京都の都市景観にどのように反映され、日本の映画監督がそのことにいかに自覚的であるかを明示している。さらに、「京都らしさ」を追求した日本映画と、国際観光都市として認識される以前に日本を映したアメリカの初期映画１７本を比較するという大胆なアプローチを試みるにあたって、アメリカ議会図書館、国際交流基金でのアーカイヴ調査、国立国会図書館所蔵の政府関係資料調査などの綿密なリサーチを実施した上で、製作当時のアメリカで流行していたジャポニスムからの影響という観点から解釈し直した点は今後の初期映画研究としての新しさを備えている。結論に至るまでに、映画学の分野に限っても、テクスト分析、主題論、作家論、映画産業論、観客論を横断しながら多数の精微な作品分析を施し、「京都らしい」都市表象がすでに議論した作品群（第１章から第５章まで）に共通して登場することを新たに発見し、これまでの京都映画史研究が見落としていた京都映画における都市表象の独自性を、具体的かつ映画史的に明確化させた点は評価に値する。

もっとも本論文が学術分野を横断して広い知的射程を持つすぐれた都市表象分析研究である反面、まだ埋もれている同時代の京都を映した映画や観光以外の京都の側面などの考察の余地を残している。また、今後の課題として、観光と映画の結びつきという観点から、リュミエール兄弟の時代に撮影された海外の初期映画や、京都以外の日本映画における都市表象など、映画研究の新しい議論の可能性を秘めていると言えるだろう。このように、本論文は、具体的に考察対象を京都の現代劇映画に絞って、人々が暮らす上で重要な生活環境である都市空間と映画の密接な影響関係を日本映画研究に導入し、いくつもの新たな分析手法や解釈を提示したものであり、その意味では、共生人間学専攻、人間社会論講座の理念に十二分に適う網羅的な学術研究である。

よって本論文を博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成２７年１月７日に、論文内容とそれに関連する種々の事項についての口頭試問を行なった結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降